忠孝伝五傳

陸

特別
へ13
981
6

本清
六
十

忠孝比王傳卷之六

養拙菴主人著

第十九回　二兒偪迫走中山道

偖も東ゝ雪村よ別れ兵庫を起て西の宮より京街道を上り泄田伊丹を過ぎ茨川を徑て山崎のつゝみを越へ男山八幡宮よ詣つ各往昔前よ合爪〳〵。南無八幡太神我願力を添へ先人よ相遇速よ敷雖言ふまでもなしの人と一ふる念〳〵夫〳〵より再び京都よ入つゝ条妙満寺よ詣て我浄坊日行よ遇へ。原来四国へ下つゝ金毘羅権現の利生よつゝ。常陸の国江戸雪村よ謁せゝ夏ゝなど一五一十説話ゝ上ゝ

別 達3
986
正

行時も早く近江に越へ讐敵に遭會潔く勝負を決し
ん〜為うく本望を達し〜るべ目出度再會を期すべ〜と豈
日別れと告急き近江をさ〜て発きつ。程うく依く来れば
居城観音寺の町に着けれ城下の旅亭に宿を求め。
するいも雪村が示教に任せ某の骨董舗に尋ねいくこて
小廝に對い曩時に這呼ふて冨嶽を再ける横幅を見せ
ぬるが。時用繁くして帰宅せり。時下又一見〜〜といくば。
小廝兼ねると起行て桐の箱に入ける巻物を持来り東が
前にさ〜置ば。まにとり熟覧するに雪村が再に相違なう
つとえまば大に喜び房主に掛合其價を問へば此一軸を

絶へて世間に稀なる再図なれば金子廿両ならでは差あげ
難〜と有まで東否にもあらず其侭懐中より金子を
出し〜房主へ遞し買おとりきへるるに此再は小子殊に有証
覚へたぐれ。但し元は何国にか出る番用なるやと澤るに。
去ば此再は訳これなの当秋處士弥なる待両人私方へ
此巻軸携来て這番我輩仕宦につき身の廻り拵んとな
沽却さきに〜固に近世雪村の再名高く且新奇なる再
図なるを価高く買うけの僥幸なりはき人達右の金子
もて衣服等調へ當相公へ宦途に赴き著さ〜が程うく家
中に就用らに頃日は城内にて剣法弥術の點撰〜契る

発句のこゝ〜巷説よひと沿ひとび東故意と其ハ恰合ろる
男ホうりと挨拶〜。良あつて其家をので病所よ帰り親
よ久平よ明き今日彼の骨董舗よいくろ右の雷油ど買
うけ。そ[illegible]を繹ぎハ最時よ雪村子の話よくろ彼ホ
官途の調度よ活却當城くは仕〜う〜其者とて全く東馬
軍治よ疑ひうゝ〜去ど世を潜ぶものうまび必定今ハ姓名
を変る変す有ぬべ〜。[illegible]氏後城をへ奉文を生きんよ。その
姓名遠ふ時ハ。夏の疑ともろるべけまバ。先得と仔細を糺
きんと。其さう奚奴久平ハ伏入き面体を恐めさろと幸い
人と頼みて城内出入の酒家へ力手よ住世。時間組連度へ

酢豆油ゑど持運せ。その動静を伺よいくく伏人よ凝ひ
うゝりけまバ。仕ふて陰よ其姓名を繹ろる。東馬ハ斯波熊
獄軍治ハ郡十右エ門と改名せりうりて敵対今ハ延引すぐ
から。さまで彼ホ同じ父の讐ろり折ろく脳
歩〜時途中よ撞見バう〜。左ろくふ一人ハ対課とす。今一
人と錯過さバ狗会ろう。兎角城をへ折へ暴発よ復讐
ろろべ〜。[illegible]相談〜一通の奉書を紙の城内へ投出
各驚所よ拝ゑ小的仁ハ上条國土氣の城主坂井小文郎
家来藤代東同渾家并よ下人久平と中者ふてのまく
年夏五月僚友平山東馬并に沢井軍治ろるの私の遺恨

ふとり。愚父平内を殺害し撫民のふらき小助们憤怒し
堪ず。主人へ致仕を願ひ是まで清國流官員遷ることろ、
東馬ハ即今斯波熊藏軍治ハ郡右エ門と改名當相公より宦
途著名の輩二石の者ども召出さるゝ巾査照の上
仰付下しおかば有難くいく右鎧倉管領ゝうり義雄の赦
文頂戴と是あるひと別し一札を差知しめ其旨役人中相
紀のうへ城を佐く木侯へ上けるべ相公自管領上
杉家ゝうの赦文披見中紛を召さ今願人の紛を吟よ。斯
波郡の両人新系ゝうら斯てふ重罪の科人ゝうり敵雄言ハ
天下の公義。捨おくべらずとやうさるとろるるに

東馬軍治の両人ハ嘗て城内へ仕官の後役向懈怠なく
勤めけるゝぞ。自然と人の物論を得。漸く発覚ゝおのれ
けるゝ代日平生ゝ交篤朋輩連忙入すり。恰絶上総の國
士氣の處士藤代東ゝる者ゝ屢所へ願ひ出足下ゝく郡
氏と親の雙言ゝうりを訴へ尚鎌倉管領ゝうりの赦文差いど
志れ若その夏相遠とれゝうぶ。行くハ免動ゝうり息慮當
城を立退きのゝと氣端云へば東馬ゝ多ゝ情原ゝ方ゝ
覚へあり。芳意のゝと夏紛。何ゝ作せ。隨ふべしと三下
我家を知り門辺軍治ゝ確と行遂ゝ。さて大夏とそ
つゝ。吾徽當城へ仕官せ。夏如何ゝそや東ゝ相知ゝ

旧須よ
雪と曽て
父の
仇を
報ずず

代國へ尋ねまゐり。曩時廳所へ祈へ出でらるゝ。時下同僚より初め世あり。固つと小子東ホよ相遇先生を迎ずるハ出ず恐懼ざまでも若城内ホて縲紲を受け関東へ引るゝ支もあらば。其恥辱たるゝ。去まば残命ゝ又代國を立退べしと。やゝ軍治慌張つゝ。彼らば猶豫難し去来扶兵のまられうち。疾く代所を亡命せんと。共ふ已が宅へも帰らず町家へ幹支ある体ゝ裏門より逃出足をたゝまゝ落行ぬ。程なく衆吏の拿犯人両人が待へ向ひけるゝ。何まも宅ゝ居合さず。家内の者も知らざまば。遂ゝ無理會其由早速注進ゝ及ける。相公波平ゝ

彼らば渠等旧悪陳じ難く逃失くゝと覚へゝり錯過て八祈紘の者へ言訳ゝ。疾く召捕まるべしと賊曽ゝ嘱付呼くへ追人を掛らまけける。代騒動波へゝまば。東ホ大きゝよ驚まゝ偖八我ホが祈紘。さや仇人へ漏まば。罷怯ゝも逐電せたゝと覚へゝり。嘆口氣ゝまゝ城内へ頒ひ却て支を仕損ぜり。今八悔とも帰らじと。唯惘然として居ゝりけるゝ。東穂て側へ起直ゝ佩刀ゝを掛まば。主ホ遠て取すゝ。てゝと何四名の生害と久平共ゝ押拄まば。東穂の涙ゝ。あさゝ人余故郷を却ゝ。ゝり組合けゝ刃を乃落ゝ曝ゝ。乞兒野仗と成ても苦く仇人ゝ環合速ゝ勝負を決すべゝ。

り〜夏成らざる時ハ其侭自殺し。黄泉の父へ言こけ
せんと思ひ定めぬ。既に京都にて讐敵の在家知るるも。
大鷹が恶夏客居にて彼等都城を生奔し。其後金比
羅権現の示現により再今その縁家尋當しも。忽地
讐人へ漏れ変へ完くまに入り讐敵を捕逃しぬ必竟ハ
仏身の不運神仏のカもあらざる所と覚るるに去バ
前段とても憑難し。何ぞ生存故々
の母人親戚に何面目の有べき哉。故に自殺すべしと。
又佩刀にまと掛るバ久平すぐり小太郎より。さぞや
斯ハ物に狂ハせるか。今二賊ハ逐電すると城内に逃
逐るを掛るに非や。然らバのまぐ其消息も知るべくもず
彼今示捕逃すとも時節あらざる内ハ強て夏ハ成難し。
已に神の示現に水に入て失とあり近江ハ水國なれ氏國
にてハ決して本懐遂べき時なるべしと知るべし去ど山に
て獲の示あるバ意に是より中山道へ出讐敵の跡を
追紀るバ。復讐疑ひ有べらずと制する河に東ハ額き
我誤まるべし心懲まる。其神の能宜忘却せしど紀後
成知何も是より山に敵の跡を追ん。失らるハ
追るの動静を待べしと。各聽所を起てすぐに旅立に帰

第廿四　白嶺月雪東報二父雙言

斯て東望ハ城内より西兄に迫人を掛し消息を待居けるが終に其去向知さざるゝ。此上ハ唯權現の示現に任せ山乃へ出家に雙歌を遣よべと又〻旅行の視度ゝ。觀音寺の城下を起ち。守山武佐を去る。湖水を渡て彼の上を。神のおゝへの妻賀いれば。嬉て歌を鳥居元だんだの窮の風寒こみ。驛路夢もさめがゝよ庶物語ぞうを丑の夜の物として繙まゝ。

母衣やうゝ柏原世の續に傳ふる。美濃と近江の思うと急ぐ。も関ヶ原過ぎ方のゝ〻しく思ひを千こよ

信濃ふる木曾の桟道危ふくも。命を賭て蔦蘿ふまぐる山路の明暮に唯耳うまゝ物ゝとゝ。谷のゝ音籟嵐の風に落来る葵のゝ〻ぞ表を金沢に流貝ふる東王沢を顧て近江を出て徒に過る月日に驚ゝ。彼とゝ人に我他の。容貌を物色て尋ゝ夫と云るけき夏もるく。放心不下と溢ゝ。玉江そゝろに涙ぐゝ。のゝ〻ぞく斯だゝり。夜と日に継で山路を進来ゝ。當途ゝ早晩他人に逢ゝ。ゝ云形容に久平故意と変あらく。ちゝ〻ゝ言のゝひそ凡浮世の中ゝに定る夏ハ稀にして續る夏ハ哀けゝ。唯神明の不側さハ。疑ふべからず悪人ハ知何に

道とは急遽とも碓氷嶺は越ざらめ。我ホが秘蔵の勝栗
毛速めば僅三十里一日半よるべしと。励ます辞よ東は荒
爾うるぞや公の撓べきを去来やと脛巾締直し氣も張弓の
八五原や。おろしの強き蕨もるらの宿よべ川越て元山の道くぞ
凡白紙冬の空焼の笘屋の塩尻は。久日よ波枕の海晴て
行く和田よ出でりぬる。夜や長久保の朝まだき霧手拭ひ
曳駒も。昔を思べ望月の里と小停杖を止め。折から前面へ
旅客の白き鬅髯よ頭顱巻し。七五三縄巻る笹を冒ひ。
通て掛らて遥時急よ東ぶ前よ幷手貴方は藤代の今
郎うらずやと。問へば這方も訝るぞら。如何ふも小子

東ぶ方は何人ぞ。いかに不審なりとも僕を常く上
総の國は封内よ徘徊いく手後験曜頭院とやのこれ
まで三年ぶ須まて愛波の国象頭山へ攀躋ぶ例も東
海道のく上ると未ぐ中山道を通りやざるまく。こそび遂
願ようき。此度を経歴不図這所よて貴方を見うけ奉る。
偖まづ上る夏のく。郎君疇昔尊大人の讐とむとひ
るまんと。本國を出るひしとう。彼るよ其讐敵と聚へ
東馬との軍治いのを小哥今朝塩奈田宿よて見聞いと
云へば東は眉皺め而其者どもは何地へ行く。去ば小耳も
徳くまとや若を傾げ急ぎてぞ下らまと。浩を嘆

三人ハ実ニ有難〳〵。則今日ハ霜月十日正ニ推現の後日
なり。今信者の説話彼とく是とく皆ことゝ神の嚮導ぞ。
と合掌敬てゞ喜悦ぬ。東修験ニ近寄て。足下今彼おゝ
逢ヒ〳〵ハ是より里程ハ如何程ぞと。問へば修験ハ小首傾
三里ばかりハ遠うるべし〳〵。今ゝより迷冠なれども中〳〵迷路なり
ぎ。俳讃敵も行先ニ。雄水の難所を拘へ待ヒとゞ日の
内ニハ越べからず。止宿ハ討ろニ沓掛ぎ。桂井沢ニうべ
あと。返報ニ東ハ修験ゞを握不側ニ。今日ぞ仇人の去
へ向委く知ヒるも皆足下の賜なり。と悦べば。修験も急ニ
礼を返し〳〵。唯何ぞも由ぬるく首尾ぬく復讃なるひ本国

ニて渇んと。笹おつ取て肩ニ掛。行影各見送つゝ久平
氣力東ニ對い。今修験の語のごく。兄弟も道を急ぎ待
ヒとゞ。迷路ぞ難うるべきぞ。如何ぞも嶺ハ越べからず籠
中の鳥網裏の魚何所へやのゞヒ。今宵委細桂井沢
ニて仇人の止宿を探ぬ。連夜起て嶺ニ待うけ思侘
ニ対取んと云へば夫婦ハ尤と急ぎうづらも行路の左右
に配りつゝ日のかい暮て衝くと桂井沢ニ着けるば久
平這方ニ二人を待せ獨其所這所竊くと數夏の様子
を捜索せ〳〵ニ其と覚しき人有ぬぞ。結て胴ニ的當東馬
軍治うるぶ喜悦で立帰て良東ニ呼て其辺りニ潜〳〵

灵羊の山巧
孝子の舟
より一時に
とぶ

其夜は眠て寐もせらず。夜半より興て行装をとのゝ間く
と旅亭を立出。かゝぐゝしく身策雄水に向て急ぎける
頃は霜月十一日の霄こう雨氣を催して雲間より出る月影
も早晩かくまでて髪暗く嶺の路より徑過りける北風い
と〻肌を犯し。凍寒筋骨を透すがごとく覚て歩を
ふ凝けるる者ども。鉄城をも破るべし。石擲をも砕くべ
きと正面より吹を應答うるら岩を縮苔より滑て。谿に下て
崖を攀苛くして一里程もまゐりけるに空はいよ〻嶽〻と
して雪とるり行先鷺も飛すが如く折く雪巻風の強
きゆゑ路の前後も別ちられ。疲て徑路に迷ひ入るべ

今は共に行難て凡へけるゞ傍に松樹の五六株山の懐に
霰し掛りとけるを見けり。よろこく其内へ這入り。やゝ息を休
けるに。猶寒氣に堪へがたく久平四邊を探し。拾枝を折
来て。落葉を掻集め懐中より鑽具取出し火を点ず
焚火に傍てあたりる。少停有て雪も霽止み東方明く
曙行まゝに共に出て見せば甲斐信濃の山〻一面
皚〻と髪髢として銀世界の如く燦爛度に地上星こ
とく上つゝ見えば東喜び久平に對い今朝天色晴るる
とて嬉しゝ左に見る山の上とて驛道なり新に受て
圃に足場〻。いざや登まして渚とする。千里行を歩薛

蘿を傳ひ盤面して已に嶺平に出けるに、使佐人の来る
を聞いまだ有まじと久平遥に向を見やるに、あるべく知間の
徑路に入馬の微に見えけるゞ窺めて彼方に疑ひなし。
東馬は全く當の敵君達必ず錯過しのまじ。軍治は僕
が受取るべしと草鞋を締て足緒うらし。今やまだ待居
ける。浩々たる程に両人は迎に中山を越へ注奥へ下
らんと思惟しけるゞ急遽に命せしうまが路費の多下
きに狼狽し上州高嵩に軍治が呼縁あるを便に身抵と
金子を借て春を待て登程せんと已に信州狭井澤まで
来つるゞ黄昏近く成るまゝ日の内に嶺は越がたしと。
旅亭を訪ふて病うく暫に夜の中に雪花のゆく降積
けるを見て山路の歩行難渋なるべしと馬卒を備へ紀風
の寒さを凌んと馬上に掬油を手覆ひ已に嶺の路を来り
けるに不意中傍の岩陰にうゝ怪の者迎接来あらけ
如何に両人曩者近づきて尋常に勝員做んと城内へ
須ひ出しに。汝ホ風を喰つて其地を逃失しぞ卑怯なれ。
去く年音信山にて父平内を殺害恨のゆゞ人うゞ殺の
べきと呼るに久平其時共に対死せし歩兵小平太が
子主元の讐一分例に割屠と罵るバ軍治は連忘れ
けるゞ東馬億せしに氣色うく洋く的東に對い應答も

是まで遊まゝ〜。去ても不審ゐるゝ汝が妻我狼谷
ゐてくまに曲〜と言せす果ず玉江返報當下汝が爲よ多
員〜ゞ。崇き護身經の奇特よりゝ身ゝ恙ゐるゝ〜ゐるゝ
年頃期〜恭山の敵覚悟せゝと霜降小股ゝ構へつゝて
發ゝ馬卒ハ慌張本来〜道へ逃帰る。東馬詞くとゝ笑
馬ゝゝ下ゝゝゝ爽倒も降緒を取て襟とゝ。ちや小賢
兒輩。出かゝゝ〜返討ぞと大刀を脱て顔會ゝ暮〜。會
釈もなく立向へバ軍治も同ゝく跳て下ゝ。各ゝゝ身を
惜まず雪花を蹈散ら〜角又久平ハ軍治を相手。受ゐ
流〜ゝ刀の列鉄一向闘争とゝんへけるゝ。焦燥て丁ど軍治

が激く撃て身を僻き。腸深く斬砕ゝバ。二足三脚後退
を跟入てゝゝゝゝ。左の股を斬下ゝバ痛ゐに堪ず俯ゝ
前へ倒と仆るゝを其まゝ踏返〜蹈跨吮を刺透す。去
ど東馬ハ初ゝゝ二人を相手よ高とゝせバ。巖石を倚ゝ
ゝゝ。両刀を自在ゝ遊薄〜左ゝ衝右ゝ排ひ。乱虎のごく
活動ゐど。夫婦も敢て當ゝ難く。呼ぐゝ浅疾を眉六吏
刀ゝのみ成ゝゝバ。東馬ハ猶も諧込〜〜刀尖咬く切拈
ゝゝバ。已ゝ危くゝゝけるゝ。忽如逗方の絶壁ゝ四辺
ゝ響く響ありて。如何ゝ東仏閑ゝ勝員せゝと孤ハ
戒淨坊黄褐色の衣を高く絞ゝ左手ゝ鉄禪杖を衝き

右の手よハ水晶の大珠數を握つ。片脚を岩尖よ踏掛け巖下を白眼て立るまバ。俱の東馬見るよりも停足

其所へ駆来る。久平ゞ其手く打る准備の銑銀東馬か

額へ十文字と立バ流る血液眼よ入る刀尖つのよ取次よ

ろつと。やこけよ思へと為方なく。唯首打よ両刀遊ゝ惜動

狂へあつとさるよ久平得たりと跳掛て右の腕を打落せバ

東馬今ハ是迄と思ひけん。左刀を抛棄て。路上よどつち

と座ゝるまバ。東立寄大音よ三年ゞ間期得たる父の讐

今日唯今報るゝ。恨の刃受取て公下を一鉄拳も透

と突通せバ。叫と後へ倒るゝを久平主従も寄添て瞎と

貫バ東其侍共参掛つ吃を二刀刺雀躍して立所へ嬉然見送

戒浄坊巌畔より下つ来まバ皆ゝ喜び且驚る。師ハ何国

より如何ゝて此所へ来りもひしと問へバ。いろゝ我曩日

你達よ別まて後久しく近江表の音耗なきを安ぶ直よ

京都を出立ゝ早速彼地よ抵ると恰其日讐の両賊

旧悪発まバ城内を出奔ゝ你達仇人を追山道へ下つゝ巷

説を聴我又急よ跡を追駆来りしが何地よて擬ゝや你達

且両賊ゝも追跟す。已よ昨夕比嶺へ来かゝつゝ山頭内

を催ゝ夕風いとゞ強く固つと樹下石上を家とするハ僧侶の

常なまバ。あまるる洞口よ倚て一夜を明しぬるよ今朝

藤代東夫婦父の敵をうちて再び坂井定治を渇す

目覚めまぶ枕上えげしき殺伐の音吹まるまく聞れば。
伝達が巖下より砕瓊乱玉を蹋散らし二賊とともに國爭の
形容我も不側と思ふとぬ出會夢幻の如く覚へ目撃もせずに
ゆくりの嘶く花くしく善も本望遂らまくと誓バ
各まをつく何ら何ぞ尊師の深切を尽し隨所の
其恩恵の夏謝何より譬へやべきと共に悦び敬へば戒浄坊
東を揮し岐阜ハ駅路うまバ隙取らバ人目に曲らん唯此
上い庁時も早く帰國を急ぐ肝要うまくときへバ仰せ尤也
故々の土産ハ是ゆくりと東久平そふに立二兒が首をよ落し
桐油を截て押包ミ各腰に徐屠戒浄坊先に立て山路の

寒氣も歩ゆ足雪を踏分くて難をさして下つ来り。
既に上州坂下へ着けるバ酒肆に入て朝餐を喫し一盞
茶時労倦を憩ふ去来や故々へ急ぐと皆ゝ勇み連ぶち
て下総さして下つける

第廿一回　泰師嗣法日行隠居八幡

偖も是ハ年頃所寵し両人の讐敵を討滅せ公勇て
昼夜を別ず路を急ぎ下総土気へ帰つ来りぬ母小
川を始め親戚故舊久しき旅中の漂泊艱難を慰め悲ぶ
ゆく帰國せし夏を喜悦あくりける。原来東ハ即日香花
院へ詣で父平内の墓前へ二兒の首を備へ拈香頂礼して

復讐のよしを告て霊を祀つて其うり城内へ復讐故障なく帰国せ
し越を達しこれ城を定治大よ喜悦の心委細東金父入居く
中送らる早速東夫婦をとらかされ従来諸国流宕の内百折千磨
の愁苦を省ず本懐遂帰国せる孝心を称歎あり則父の苗跡を継
ある平内と改め知行百石加増し奮職中分らる猶又久平が下部よ
希なる感義を感じ暴日鎌倉の医師玄琢が厚情を受る其ゆ女
有けるを渾家に做べき由を命ぜらる食録百五十石を賜ひ中納よ
登庸有れば各喜悦の眉を開き難有越を送て門前を退公
ける。斯て定治今般東等ゆ復讐の始末全く神明仏陀の冥助成
と夏を崇敬し封内よりて金毘羅権現の社地を賜ひ一宇の宮居を造立

嘗て復讐顕院が実意を思ひ其者帰国の後永神祠の現さ
るべしと命ぜらる孫ゆ日泰上人暴日王江へ賜し經文の奇特且戒浄坊
の東ホよ附流まて夏清の恙ゆを感歎あり再寺領二百石を寄附
せらるけり去ば二師の厚徳愈遠辺よ流布し弘ゆ衆生流度の大導
師なる夏を景行す時よ衆師年齢既よ古稀よるさせるひけるば上
総八幡へ清浄の地を占つ圓頓精舎を開き退隠しる法を弟子戒
浄坊よ嗣しめるゆ是知意山本行寺二世日行上人と称し奉る代の
高僧其清行潔操先徳を恥ざるぞ実仏法東漸の機會皆帰
沙法の時運山門の繁昌無量の道場幾久へぞ目出度かりけ

忠孝比王傳巻之六 大尾

南總　養拙菴主人戯作

東都　南仙笑楚満人校訂

東都　溪齋英泉画

備書　瀧桂　喜

文政八稔乙酉孟春

精工佳紙善本六巻

京都　伏見屋半三郎
大坂　河内屋茂兵衛
江戸　大坂屋茂吉
仝　蔦屋重三郎
仝　丁子屋平兵衛

書房

忠孝比玉傳略

良醫ハ國を醫し良醫ハ人を医すや菊然の養拙菴ハ医を業とし多仁術を專にする所とす閑雅の格思君のかゝる劇文をさへ作りて雅賞を示ス。正に是良醫の國を医し。良醫ハ人を医すれは異ならず。養拙菴性々岡野氏通名ハ養拙字を子達といふ在邦必達在家必達の語を取て一ハ邦文とよび狂名して物毎の津

多奈とゆふ太平樂及白紙等は、清新有り
其拙筆々原來東武淺草の產にて、乳母とは
呼び乃真顏の筆ぶりにて、此屋を勤しうど
市丹は賣家をいとひあり。今南總の八幡に隱れ
名をうづみ跡をくらす志操あきらく嚴子陵
陶淵明におとらず。邂逅東武に接ぶの日、予が
草廬を訪ふて、這の若稿を見せしめ傳に
書肆文溪堂なるものあり、まことに梓に

上せん事を乞ふ。養拙等固辭しあれども
小子今加茂邑村落にそのそう授正の
功を終に成ん。後來人のみ見すべきものにあらねば
かやこの業を思ひもよらずと更に肯とせず。
予曰く、小子も又不學短才にして、お倦書に
接ぶ乃そこの文を行ふ。是れ拙きもとゆへ
年頃好み所迂闊にして、ぼうひ手にて業乃遠ひ
うえど、謄寫の誤を

正すこゝろよせびとの人ど徳よ剛厳のらくる公
神の徳の真ちうてん。さいく男子の賢ふ事
ゆきのれうく手間の文雅賞の夜話をあるひ伽
婢史うまびゆく是為をとがむる人もうくんよ。
せそれをひやすることうまと強くすくむるが為。
義ゆうくうべのかけくれたうれぬど文渓堂が
ち為こびひへんよのれうく彼の下和の玉ゆも
かくこ程で我為乃。若羽孫うえめうとりふ公其

偽ゆよ為尋比玉傳ゆうべ侍ふれ。千時文政
龍集甲申冬十月東武橋街狂訓亭乃
小窓下よ毫を走こぐ

南仙笑楚満人

南仙笑楚満人

太平國恩偉談　十五冊
太田道灌雄飛錄　六冊
木曾義仲鳥臣錄　十冊
鳥臣錄第三輯　五冊　近日出板

文政八乙酉
陽春

越前屋長次郎
丁子屋平兵衛
中村屋幸藏

日本百將傳一夕話　全十冊

松亭金水編述
柳川重信畫圖

抑も本朝開闢以來　神代のことは且く舍て。
神武の皇朝より今に賢び
彼西土無ぐ挑なりで三千年に向ともその中間に生るるものもく義を恒河沙ぞやかく
限りもなき人物のうちに武名海内に溢れ功を蓋世に遺せるもの。元來挙て數ふべからざ
るの中にも傑然たる名將の事實を撰び輯むる處一百員上古の　神武天皇
のこと順に奉りて勲績をもて道臣命に肩を並べ千古獨歩の
豐公に畢はいまを倩作者が杜撰を輯めるる所なるも往昔林羅山先生その
人物を億兆の中より擇び出さまして百將傳と題せられ各〻に一代の勲績を敍
畧と漢文にて銘せられ書あることは人のよく知る所にして万代不易の名書なれば
今に至りて仰ぎ尊び親しい其文を風雅に和らげ親しい俗漢補して童蒙の
觀やすからせんと何まとも小冊にて事ゆきぬべきかと我
皇國に動績ある名將さ

傳を擇ばず惟異聞珍説をも掲げ出して是等に一夕話と銘しけるハ彼浪華人が編輯せる百人一首の一夕話なるもの趣を擬へて綴らせるとの腹稟なり幸ひ浪華の書肆文堂余が志に同意して開板せんと請ふにより速に筆を採りて短才固陋も顧ず揚党脱し梓に上して速きに発市せんと然も抑ともなる自ね以前の体なりし鄙し神武天皇の御時より天正の際に至りて年数凡二千二百余　帝王一百八世を経玉ひ上古中世近世と時代の易るのミならず一百員なる良智の将その行ひ是一ならず諸ふいへ十人に十種の気象なるのみならず権謀智畧の変化あれバされば此書を座右へおき好みに随つて巻を開けバその時代の風俗及び一治一乱いふも更なり其の人これ出自家系或ひハ詠ぜし詩文の佳作且まさきれに連る人の物語さへ巨細に載て余まところなけれバ諸書を集めて彼と是と心を労さんその人々の本傳を知るの便捷なり是に繍像を加へたれバ親しく童蒙の手に触て讀ましめんと思ふが為のミ全く光人が多年の丹誠今まで綴りし遊戯の書と斎しく聴なしたまふことなかれ

浪華書賈　群玉堂　河内屋藏版

新刻増補 萬代早引節用集大成 眞字附 全二冊

節用集の善本數板ありて世に便利成事譬ふるに物なし雖然それなく常用なる文字不足なりて隔皆撥捽ひ遺憾少からず此度倉田先生丹誠苦心の功を積く其不足雅俗の文字を輯録し尚諸人日用の事を數多増加し新板大成なし諸君座右に置きて以高覧を給ん事を希而已

○薄葉摺出来仕居候間御用向奉希上候

増修 續王代一覧 正編 廿五冊 初帙 十冊

此書ハ人皇一百八代後陽成院天皇天正十五年より一百九代後水尾院天皇元和二年迄三十年此間の治乱変政乃沿革名人達士詩歌連誹香茶名僧知識の傳記神社佛閣の興廃金銀米錢の差分をしく紀して漏ることなし近原書ハ世に行れ挙ざりし故柳菴先生盡く其本書を引記し之を一事一句を胡乱なくして座右第一考古の小史とならし續編ハ元和三年より出板

開巻驚奇 侠客傳第五集 全五冊

此書第四集四十回まではは故曲亭翁の作にして普く世に知る所なり然るに曲亭翁物故せられしよりて竟に結局に至らざりしを浪華の萩亭翁其篇を續ぎ第五集四十一回より全く作者の脚色を推考して彼意に違はず編述しまでと五集五冊既に刊行す尚六集を既に脱稿せられたれば近きに世に著すべし希はくば四方の君子本集に賛ら高評を賜んことを

善知鳥安方忠義傳

右の書初編四冊後編四冊は山東京傳翁の編輯にして普く世上に流布しむ面白き趣作と称せらる然るに結局に至らずして作者物故ありしかば看官甚く惜しむによつて此度松亭金水先生に需め三編五冊を綴り出さしむると梓行して書賊の人々看官甘しく思ひ給ふ四方の君子本集の編に従ひて高評を賜ふ華ありしかば次編も年内に出して全部に至らん事を速かにせんと云

浪華書肆 群玉堂主人誌

甲陽軍鑑 合巻拾冊

一名武田全書ともいふ信玄公御一代の戦功武略を記し譚也

釋尊御一代記圖會 全部六冊

浪華 山田意齋 連参考
江戸 前北齋老人 圖画

釋迦如来の御父浄飯大王の御即位と蔑端として憍曇彌摩耶夫人合如来摩耶夫人の胎内に生を託しの事憍曇彌夫人摩耶を嫉て毒害せんと謀り王子の出生を妨んと道師に呪咀せしむる條如来夢中に説法父母の孝恩を説給ふ事浄飯王藍毘尼園に花の宴を催しる悉達太子誕生の事并に悉達太子御幼稚より菩提心を發しを謂釈迦提婆遺恨に思ふ悉達太子宮中を出て檀特雪山に難行して正覚成道して出山衆生を済度め文迦葉舎利弗目連及諸羅漢佛弟と成和解耶輸陀羅女の貞心提婆が十悪須達月蓋両長者の信心流離王の暴悪釈尊御入滅并神力涅槃像の紋まで都て如来御一代の事を記し圖と如き雑書讀本也

浪花 好華堂主人著編

大伴金道忠孝圖會

前篇五冊 後篇五冊

此書ハ天智天皇の御宇に百済國へ援の兵を遣されし事を首として經大臣が燈臺鬼と成し謂大伴真鳥兄と共に家國を押領せし奸悪大友皇子浄見原天皇と御合戦の次第金道の生立白鳳天皇の忠義雅明が義心真鳥の悪者金道万苦を凌て父乃仇を復し本領に安堵せし迄の奇事を洩さず記せし実録にて勿論其余の繪を加へ善を勧め悪を懲しと便しと面白き新本也

同上

扶桑皇統記圖會

前篇六冊 後篇七冊

此書ハ人皇四十代天武天皇の御治世より六十代醍醐天皇の御宇迄の公事の傳え宮寺等の草創代々の人物の行条を記したる所謂役行者安部仲丸吉備大臣衣通姫光明皇后弓削道鏡恵美押勝中将姫傳教大師弘法大師田村丸浦嶋が子小野篁在原行平業平小野小町僧正遍照菅丞相其外古人の実傳を探り精しく實録し委く圖画して重宝の書也

東都葛飾戴斗画

花鳥画傳

初篇 二篇 全二冊

此書ハ花鳥草木の類何れとなく輯されば画を畫くもの雅俗ともに需むべき画法をあらはし重宝の画手本なり

一勇齋國芳画

一勇画譜

全一冊

國芳多年の工夫を凝らし新奇妙案の筆を揮ひえらみ出して画きたる画譜普通の画譜の類と雲泥の差ひ也世に稀なる画本なり

北齋爲一老人画

繪手本水滸画傳

全一冊

此画ハ画狂老人の筆にして水滸傳一百八人乃者像を丹精凝細筆を尽せし画手本第一の書なり

柳川前重信画

繪手本水滸画傳

全二冊

此画ハ爲の柳川先生の筆にて水滸傳一百八人乃英雄を畫きわけおのおの其れ其れ特に併て其業の画を好める人の便となるべし

葛飾戴斗画
英雄圖會　全一冊

此書は本朝英雄良将名士の肖像を葛飾大人細密に画工せられしに小伝をくはへられたり諸君求めて上覧したまふべし

一勇斎國芳画
三國英勇画傳　全一冊

もろこし呉魏蜀三国はその名高き英雄を図にし巨細のくはしく小伝を附して世に賞しけるも守但し名にあふ一雪斎が筆力を撲ひければ見る目おどろく人が水滸画伝にもをさをさおとらざるまめかれぬ筆紙之

同画
忠臣銘々画傳　全一冊

國芳大人肖像画

此書は赤穂の義士四十七個誠忠の実伝を挙て國芳大人肖像画をそへられば求めて流行たるべく

渓斎英泉画
畫本錦之嚢　全一冊

此絵本は金銀銅鉄象眼鐺物彫物溶塗塔宮殿の彫物根付搾算彫備金色飾漆陶器絵并に染絵金翻絵あるひは煙管并花布物蒔上絵際物形職画その外染職にわけ用ふ器絵山水人物花鳥虫獣ひな形いろいろ職巧の写生となせる万家大に益ある絵手本なり

葛飾戴斗画
萬職圖考　初篇 二篇 三篇 四篇 五篇　全五冊

大阪書林　河内屋茂兵衛　梓

新増補
萬宝引節用集大成

廣梁綴合壱冊に笔有表紙にて至極奇麗に仕立机上のさびしくにて甚便利な書なり

此節用集は字数殊に増し文字を尋ぬるに仮名数の早引にて其中に天地神佛官位人倫衣食器財草木生類姓氏言語等の部分ありて仮名附は諸学家によつて改め又行草文字を揩書時は倭の真字にて筆画の類字を正し和漢官職并名義現役当上方諸御大名衆は部毎に御官領国城主等に至る別名并古跡神社佛閣悉く国所を附す木草種の異名を正し

孫爰姓氏の尚時何國諸侯の庁舎中に有事を巨
細小記し。巻末に諸證文手形を案文男女名頭相性
年代六十國諸国一ヶ官都合地四千官用名其外
重寶の支数多案既小漢土字書小も凡四百三千余字を
く。悉く紀憶とる者稀少り。本朝の熟字俗語小至てを
驚歎事に。先ず取扱ふ文字と俗志とる事多。今此
百代早引を字数拾一万余紙頁八百三千余ページ成文字に
て。も漏さず集録する古今未曾有海内無双の節用集形を
三都先諸國都會と書林行所寄と此求メて給へし

六樹園大人著

都乃手姫り　全一冊

にして趣深き紀地の中も清州古両国にしあるれ有る反
紙和文にて。るゞくふうを
もる名文なり

徳齋原先生著

先哲像傳　全四冊

先哲名家の事蹟のこと省像の
傳まこと新ぶりたまく古人の省像小對る
時ハまぶり逢ふ心地して其人ハ徳も想像
ることなる此編ハ学者書家と医師
聞人雅技小いたるまで由来正しく紀
省傳と真跡と集め各小傳をそへたり

新著門集　全十冊

此書ハいと古くより世に
行なる字紙小しるすあり
とゆゑ孫況書漢字を集
れ寶縁ちれど集中人
あの性名居所且年齢を
詳ふあらえしに古今
未曾有此孫書なり

山崎美成大人著

名家畧傳　全四冊

先哲叢談近世畸人傳よりとれる
世よ名家きこえし篤行の学士
淵遠乃文人絵ゑ先ありしき
言行と集録せし書なり

淡洲樓馬馬大人評

閑卷百笑　全二冊

[illegible]

松亭金水著

大平樂皇國性質　全二冊

此書を儒者と併者の説に異なるを論ずと説しめらるを古今風俗の変化あるひを神社ふ鍔ほ紙うけるふ誤ありといふ[illegible]或ハ市ぞんじ三味線琴に[illegible]豪富貴士を飾る丈婦喧嘩やいるもいはゆの嘆云その外挙てうとへ[illegible]何こんとなり雑語[illegible]るふ説と性けきる孫書うり

浪華書房　心斎橋通博労町角　河内屋茂兵衛藏板

東都川關先生著

早引人物故事　全部二冊

此書ハ本朝の昔より近世ふ名将賢士ほ[illegible]ぬ待哥連歌俳諧の達人風流俳優名妓いるまで世ふ名ある人を集めその性[illegible]時代[illegible]安く記し故人を捜索するに便ふ[illegible]

同　誹林沾凉大人著

近代世事談　全部五冊合巻三冊　後篇近刻

此書ハ東山殿より[illegible]味噌服食菓草木花菓器財万物近代来舶[illegible]年番諸流書画待歌連俳香茶生花接芸及び芝居ふの起原人倫雑事年中行事故実ふ何の頃より初まりしことを委しく[illegible]たまぶ扨右ふ[illegible]博識乃捷径ともるべ新書之

町家萬寶

商賣仕法大成　全部六冊合巻三冊

一名萬金産業袋

此書ハ諸職ハ秘密奥儀ふいるまで委しく[illegible]あ[illegible]形ハ図ふ[illegible]諸国乃産物ひいすふ[illegible]備ふ商の重宝しるしもるり此[illegible]れ[illegible]ハ後篇ふ[illegible]

浮玉堂

手嶋堵菴先生述

女訓女前訓蒙種

姿見

繪入 全一冊

此書ハ女子七才より教ゆべき事ども書ノせ[illegible]
孝行貞操のみち失ひ質素の節淡泊[illegible]
[illegible]
衣服[illegible]
[illegible]

鎌田柳弘先生作

心學五則

全壹冊

人倫の正路しるべ持敬積仁知命[illegible]
[illegible]五則おのれ[illegible]
先生五則の人なおのづ[illegible]
[illegible]
[illegible]

六樹園大人譯 前篇六冊

通俗排悶録

後篇六冊

溪齋英泉画

浪速書肆

心斎橋通博労町角

河内屋茂兵衛藏版